

マルサス主義の国際的普及

永井義雄

昨年に引き続き、対象を変えて第二回目を試みる。昨年は国際波及と言いながら、ブリテンを含めた英語圏（ブリテンとアメリカ）を対象とした。今回は、ヨーロッパ大陸のうちで、ブリテンとの知的交流の深かったフランスとイタリアを対象とする。すなわちラテン系言語圏に限定した。またマルサス主義とは言いながら、『人口の原理』の影響に限定している点は前回は踏襲する。

なお、組織者個人の考えであるから、本来は表にだすべきではないが、前回セッションにおいて、優生学思想との関連を問う質問があつたので触れておくと、この質問は進化論ともかかわる（ダーウィンにたいするマルサスの影響はダーウィン自身が語っている）けれども、すぐれて20世紀的問題だとわたくしは考えるため、波及の下限を20世紀初頭におき、われわれの今回の研究対象から意図的にはずしている。なぜならわたくしは第1次世界大戦の前後において、理論的思想的パラダイム転換があつたと考えるからである。フランス革命からロシア革命までを自由主義志向の時代（さまざまに規制・規則の導入があつたにせよ、規制・規則はかならずしも自由と対立するわけではない）と考え、20世紀を国家の市場介入による修正資本主義志向の時代と考えるからである。この点は参加者の方がたに了解をえているわけではない。

さて、フランスについては、お二人の報告でほぼフランス19世紀のマルサス問題は網羅され、イタリアについては堀田報告が基本の骨格を押さえてくださるはずである。マルサス人口論問題は、政治、経済、社会（運動）、宗教の各方面にわたる問題であるため、問題を網羅しつくすことは個人の力を超えるから、フロアのコメントにより論議を豊かにして頂けることを切にお願いしたい。そのことにより、マルサスが入って行った国ぐにの構造問題、理論的思想的課題が浮き彫りになるはずである。さらに前回の報告とあわせて考えて頂くと、前回の対象であつたブリテンとアメリカの問題もさらに深まるはずである。この意味で、わたくしは、前回の三報告をごく短く紹介するところから、今回のセッションを開始したいと考えている。

このほかにもわれわれは、ドイツとスウェーデンのペイパーを用意しつつあるし、日本についてはわたくしが別のところに書いていることを、申し添えておきたい。